

今 this

週 week

の of

私 I

日が短くなり、いよいよ秋めいてきた。そのせいか、急ぐわけでもないのに夕方になると足早に町を歩く。陽が落ちることが怖いのもかもしれない。

吐き出されるように電車から降りて、流されるように改札を抜ける。そこから出口までは指向性のないような流れに流されないようにして向かった。これだけ人がいながら知り合いに会わないというのは、異常なのではないかとふと思う。

駅を出て感じる広がる都会独特の空気は、いまだに慣れない。それでもイヤフォンで聴覚を世界から隔絶して、大型書店へと足を向けた。

呼びかけてくるティッシュ配りの女性はすこし疲れたような顔で、それはどこか中学時代の同級生を思い出させた。

けれど彼女は僕に向かってティッシュを差し伸べてくるだけで、数年ぶりの再会を喜んだりはしなかった。つまりは同級生ではなかったということで、残念に思うでもなく無言でその脇を通り抜けた。

同級生に似た彼女を見てから、僕は数ヵ月後にある成人式のことを考えていた。書店の入ったビルまではまだ遠い。

インターネットの普及によって当時のクラスメイトらと連絡を取り合うことは容易になった。それでもやはり、その当時仲の良かった人としか連絡を取り合わないの、ひとつの教室に押し込まれていたころのように無差別に情報が入ってくることはない。そしてそれはきつともう、年齢を重ねてしまった僕たちには訪れることのない環境なのだろうと思う。僕たちはいつの間にか声をひそめて話すようになり、周囲の目をうかがうようになる。それは悪いことではないだろうし、悲しむべきことでもないだろう。ただ、もう二度とあのピンボールのような世界には戻れない。

社会はそれぞれの事情で埋め立てられていて、事情の上に人が立ったり座りこんだりしている。いじわるに築かれた事情の山を登ったりしながら生きていく僕たちは、成人式の日だって事情を掘り越したりしてしまうのだろう。

そんなことを考えると気は滅入るばかりで、目の前の本屋は現実世界から目を背けるオアシスのようだった。

店内に入ると目の前には数人並んだレジカウンターがあり、その前を歩いてエスカレーターに乗った。目的の階について、上代文学の棚を上から見ていくとなりに制服姿の女学生が並んだ。高校生がこんなものを読むのだろうかと思って視界の端でうかがっていると、万葉集の並びから一冊抜き取って颯爽と去って行った。僕も目的の本を彼女が抜き取っていった並びから一冊手に取り、ふたたびレジカウンターへと向かった。そこには制服姿は見えず、クレジットカードを店員に差し出しながら僕はまた成人式のことを考えていた。

不真面目な学生にとって最大の関心事というのは休講情報くらいである。そして来週は学園祭があるために、出不精な学生にとってちょっとした秋休みとなる。

そして僕自身は不真面目で出不精な学生だ。授業がないというくらいのもので喜ぶような非常に低燃費な設計となっている。エコ・ヒューマンというのも非課税にしてもらいたいものだとつくづく思うのだが、なぜかマスコミは消費を奨励するような口ぶりである。エコロジーとエコノミーの両立は大変難しい課題である。

未来の小休暇を喜びつつ、今週の僕は憂鬱な一週間を過ごした。週の頭から人身事故の影響で電車の中に閉じ込められ、充電し忘れた携帯電話のバッテリー残量は限界をむかえようとしていた。散々である。携帯電話依存症というものがあるらしいが、実にくだらない。人が依存しない大抵のものは商品価値を持たないのだから、病気のような扱いをするのは安直な考えである。人は依存しなければ生きていけない。電源の切れた携帯電話を片手にそんなことを考えていたら電車は再び動き出した。しかし事故の影響は同じ路線を走るほとんどの電車に波及していたため、度々電車は停車と発車を繰り返した。

ようやく着いた大学で腕時計を見ると、授業が開始して三分ほど長針が動いていた。僕の横を通り過ぎる人は皆一様に早歩きで、しきりに腕時計や携帯電話を見つめていた。それで時間が巻き戻ればいいのだろうが、そのようなことはない。時間を取り戻すことはできない。だから他人から時間を奪うという行為はもはや殺人罪に等しいものがあると思うのである。

五分ほど授業開始から遅れて到着した教室ではすでに先生が何事かを喋っていて、数人の学生も何事かを喋っていた。いつも座る席あたりを見ると、友人がすでに腕を枕にして気だるそうにしていた。その頭の横の机を叩いて、挨拶をすると彼は体を横にずらして僕の座るスペースを開けてくれた。そして緩慢な動作で座った僕を見て、携帯電話の画面を見せつけてきた。そして開口一番こう言った。

「今日の三限、休講だってさ」

カメラというものはいつだって真実ばかりを切り取るけれど、最近のカメラはそうでもないらしい。デジタル化というのは恐ろしいもので、任意の色を抽出してみせたり、トイカメラのように不思議な色合いにしてみせたりする。カメラというものにはほとんど興味がなかったのであるが、義兄（予定）がカメラ好きということもあり、彼の撮った写真を見せてもらうことが多くなった。被写体の多くは姉であった。見知らぬ女性の姿が見られなかったので弟としてはほんのすこし安心したものの、残念な気もした。本音と建て前というのは実に難しく、使いどころを間違えると大怪我を負うのである。

そんなわけで、たまたま帰ってきていた姉にカメラをねだったのである。なにせ「あげる、あげる」と言われて三か月、誕生日プレゼントをまだ貰っていないのだ。小金持ちであるところの姉は「いいよ。どんなのが欲しいのだい」とにやにやと尋ねてくるのだが、上限を設定するように言うと「一万円くらい」というのだから油断ならない。ハイエンド機を買ってもらおうとは思わないが、一万円とは探すのも難儀である。しかしその条件はひっくり返らないと弟はすでに察しているのだから、姉弟とはつらい。

インターネットでいろいろと調べてみると、意外にもデジカメというのは安価で手に入るものらしく驚いた。しかし性能としては劣るようで、デザインを重視して決めることにした。

あらかじめ見終えて、二、三種のカメラを見繕ってその旨を伝え、「んじゃ、見に行こう」と言う。外は小雨と言え雨が降っているのにである。「でも私、今日で帰っちゃうよ」なんとも“帰る”という意味合いがもう数年で変化するのだなと感慨深くもなるが、それは困った。「仕方ない。行くか」そう言って炬燵から這い出した姉弟であった。

とはいえ、都会でもない家の周りに大きなカメラ屋や電器屋はないので、一番“ありそう”なカメラ屋に向かった。十分ほど見て回って「ないね」と言う姉はすこしうれしそうであった。どういうことだろうか。パンフレットだけを手に店を出て、そこから一番近い電器屋に行くことにした。そこでは外壁塗装中で「おいおい、営業中なのか」と不安にしてくれたが営業していた。しかしやはりそこにも置いておらず、仕方なしにオーディオや冷蔵庫、洗濯機を見ていくことにした。最近の家電製品の進化に馬鹿みたいに驚きつつ、まるで変わらない人間同士を見て笑った。

帰り道では最近できたスターバックスの混雑ぶりを見て複雑な心境にもなった。その様子を隣でうかがっていた姉は満面の笑みで「帰ったらココア作ってよ」と言う。コーヒーを淹れろと言わない子どものような姉は、本当に結婚などできるのだろうか心配になるけれど、寒い日のココアは格別においしいことなら僕も知っている。

“春夏冬”と書いて「あきなし」と読む名字があるらしく、それはそれで縁起のよさそうなものであるが、実際の季節がそうなのは困る。とくに服飾関係の市場は大いに困るのではないだろうか。

ところで、三色団子の色が桃・白・緑なのは、それぞれ春・冬・夏を表しており、“あきない”ようにという意味らしい。しかし私がよく目にする串団子は四つ刺さっているもので、やはりすぐに食べ飽きるのだ。日常生活というものもそのとおりであって、なんの変化もないような日々を送ってくると、あらゆる感覚が鈍る。たまには、日常とは異なる、空間へと赴きたくなるものである。

そんなことを思いながら、スーパーで買った惣菜とともにごはんを食べていると、茶碗が欠けていることに気がついた。何年か前に自分で選んで買ってもらったお気に入りのものだったが、陶器というのは割れることが宿命づけられているので仕方がない。そういえば、と思い至り、食後にインターネットで陶器市について調べてみた。するとなんとタイミングのいいことだろうか、翌日から開催だという。その旨を両親に伝え、では行こうという話になった。

翌朝めずらしく休日に早起きをし、午前うちに家を出た。しかし、目的地に近づくにつれ道には車があふれ、車社会になった日本をあらためて感じるようになった。そして、ふだんの倍近く時間をかけて目的地へと到着した。

さっそく、両親が気にしている作家の場所へ行くも、どうにも気に入ったものがなかったようで、なにも買うことはなかった。私の茶碗を探しながら周りを見ていると、もみじをあしらった陶器を見つけた。売り子をしていた作家に話を聞くと、どうも本物のもみじの葉をつけて焼いているらしい。詳しいことは分からなかったが曰く「簡単にできる」らしい。そこで皿を一枚買い、本日初めての買い物をした。

そして、その日の買い物は終わった。

たくさんの茶碗を含む陶器を見て回ったが、食器としては重すぎるものや、独創的すぎて実用的でないものが多く、購買意欲が湧かなかったのである。

車での移動は帰り道でも長引き、ひどく疲労した。家について降ろす荷物がすくなかったのが幸か不幸か、誰も言及しなかった。

もみじの浮く陶器は台所の流しに水を張って、沈められた。水面に揺れるもみじは落葉のようで、ふとヴァイオリンの音色を思い出した。秋は、終わったのだろうか。

電飾が街をきらびやかに照らし出し、にわかにはクリスマスの訪れを伝えてくる。全国のスーツを着たサンタクロースたちは元気にしているだろうか。

今年一年のエコ活動で作った二酸化炭素余剰分を消費するかのようには駅前で点けられた色鮮やかな電飾の周りには、走光性に従うように、人が集まっている。蛾よりも醜悪な人たちは、緑や赤や青の光に気持ち悪く照らされて笑っている。しかしその横では眉間にしわを寄せながらタバコを吹かすサラリーマンがいる。紫煙はあてどなくさまよって、都会の空気に馴染んでしまう。

新聞屋からもらったカレンダーはもう二枚きりで、今年の終わりを感じさせる。きっとこんな感情は十二月になってしまえば抱かないのだろう。それが師走というものだ。

寒空の下、吉祥寺の街を二人で歩く。ふらふらと書店へと入り、適当にお互いが見繕った本を見せ合う。なんとなく選んだ本と、読んでほしくて選んだ本の間には温度差があって、すこし気まずい。そんな雰囲気をごまかすように、選んでもらった本を手取る。可もなく不可もない表紙の本は、やはりそれほど有名でない作家の名前が刷られていた。

なにも言わずそれを持ってレジへと向かい、会計を済ました。興味を持ったなら貸したのと言うが、それじゃきっと読まないからと笑いながら返して、店を出た。

商店街を抜けて駅前へ出る。星を星屑と言いつつ人工的なイルミネーションが空まで汚染して、星を翳らせる。そんな空を見上げて、白い息を吐き出す。気温の低さを感じる現象に、地軸を思う。この傾きがきっと、人を狂わせているのだろう。

ふと隣を見ると、寒そうに両手に吐息を吹きかけている。帰ろうか、と言うとほんのすこし表情を曇らせて頷いた。今度は手袋でもして来ようかと言って歩き出す。冷えた手には冷たい手がつながれ、すこしだけお互いの片手が温まった。

楽しみな予定が手帳に書き込まれると、生きる気力が僅かにわき起こる。僅かであることが重要なのだ。急激に気力がわき起こっても碌なことがない。

予定と言えば、楽しみでないものもある。それも例えを出せばキリがないほどにだ。もし、一年を予定で埋め尽くしたなら、楽しいと楽しくないのどちらに秤は傾くのだろう。そもそも、そんな予定だらけの人生も嫌である。

ともあれ、楽しみなことがこれから先に待ち受けているのだとわかっていると、目の前の嫌なことがピントから外れて気分が晴れる。ピンボケしたまま嫌なことを通り過ぎてしまえばいいのである。おそらく生きる術というのは、こういうことなのだと思う。

予定外のできごととして、今週は風邪をひいてしまった。大して症状は悪化せず、市販薬を飲んで適当に過ごした。

安静にしろとはよく聞かすが、安静とはなんなのだろう。とりあえず、家に引きこもって音楽を聴いていればそれは安静だろう。そしてそれは休日の過ごし方としては割とよくあるもので、つまりはいつもと同じどおりの生活を送ることになった。

大学での授業でもいつも通り座っているだけで、とくに激しい動きはなかった。もし文学というものが激しいスポーツを伴うのであれば、僕はここにはいなかったらうことが容易に推察できる。

ただ最近気温が低いおかげで、駅まで自転車を漕ぐことがつらくなってきた。吐く息は白く、呼吸を意識せざるを得ない。駅に着いて自転車を降りる頃には、白い呼気を何度も何度も吐き出している。まるで燃費の悪い自動車である。いつか人間も水素だけでエネルギーを作れないものだろうかと思う。しかしそれはそれで危険だと思いなおす。

ただの白い呼気でくだらないことを考えながらホームに向かう。黄色い線の内側で立ち並ぶ人、皆一様に息をしていることが一目でわかる。生きているとはこういうことなのだろう。

人はみんな、呼吸をして生きている。たったそれだけのことが明確に視覚化されるだけで、生を実感できる。冬というのは、人に生に対する実感を持たせる季節なのかもしれないと思っは、ホームに走り込んできた電車で意識をすべて持って行かれる。そして、暖房の効いた車内に入りこめば、そんなことはどうでもよくなっているのがあった。

変色した身体の一部を見て、どこかにぶつけたことを知る。それも紫色ではなく、黄色みがかった治りかけの色。

小さなころは知らぬうちにいろいろなところに痣を作っていたものであるが、最近ではそういうことがあまりないことに気づいた。もしかしたら、感覚が鈍化して気づいていないだけなのかもしれないが。

夜中に三日後に控えた発表の資料を作っていると、携帯電話のランプが赤く光った。この色は登録していないアドレスからの着信を知らせるもので、僕はしばらくそれを放置することにした。

三十分ほどしてからメールを確認してみると、それは中学時代の友人からのアドレス変更通知であった。本文に書かれた彼女の名前を見て懐かしさを覚え、なんとなく返信を試みた。夜も更けきっていた時間だったので返信を期待してはいなかったが、すこしばかり気になって、作業を再開してもその効率は悪かった。

気分を入れ替えようと電気ケトルでお湯を沸かしてインスタントコーヒーを作ってもどつくと、携帯電話は明滅を繰り返していた。

新着通知にはEメール一件の文字。数年ぶりに回線がつながったような感覚に襲われながら、僕は決定キーを押した。

久しぶり、元気、という当たり障りのないメール。やっぱり僕もそれに対して当たり障りのない返信をして、それから何度か踏み込んだ会話をせずにとちらからともなく送ることも返ってくることも途絶えた。

すっかりスクリーンセーバを映し出しているディスプレイを見て、メールをしていた時間を感じた。適当にマウスを動かして、作業の止まった画面を表示させた。

紙幅を限りなく残したドキュメントに再び文字を打ち込み始め、空が明るくなりだすのを感じながら、それでも白いページを規則性のない密度で黒く塗りつぶしていった。



鍋に張られた多量の水を沸かしながら、その鍋の小さなことに気づく。どうとでもなるそのエラーを処理することもなく、ぶくぶくと気泡が浮き上がってくるのを待った。

水の沸騰する様子を見るのは、どうしてか心が穏やかになる。静かな水面が荒れていく様を絶え間なく見ることができるからだろうか。最近の生活には、そのような流れがない。いつも突発的で、すぐに鎮静化する。それがいけないわけではない。ただ、美しくはないと思う。物事には順序があるとよく言うが、そのとおりであろう。徐々に高まる終末の予感、その瞬間に訪れる達成感と喪失感を増幅させてくれるアンプなのだ。

地獄のように泡を上昇させている鍋に塩を入れる。海水と同じくらいの塩分濃度にしようと思っても、もうかれこれ数年は海に行っていない。はて、海水はどれくらい塩辛かっただろうか。架空の海を頭の中に浮かべていると、次第にそれは三角形の某映画会社のロゴマークを含みだした。そういえば、映画もしばらく観に行っていない。世の中のサイクルと僕の中のサイクルは噛み合わず、観ようと思った映画はすでに上映されておらず、DVDとBlu-rayの宣伝が打たれはじめている。そうになってしまうと興味はどこかへ流れてゆくのである。そして、思い出したようにレンタルショップで借りては「映画館で観るほどでもなかったな」などと言うのである。

乾燥パスタを熱湯の小さな海へ無理矢理に押し込んで、いっしょにエビをぼとぼと落とし入れる。ついでに火を弱めて、噴きこぼれるのを防ぐ。後半はテレビでイタリア人が言っていたことを真似ているだけである。

隣のコンロでフライパンで水煮トマトをぐちゃぐちゃにしながら、それらしくする。麺が茹で上がる前にエビだけをトマトの中に入れて、ぐつぐつと煮る。そのあとに適当に生クリームなどを入れて、その上からパスタを乱雑に絡めていった。見た目はともかく、昼食の完成である。

食卓で粉チーズを適当に振りかけて食べながら、午後の予定を考える。先ほどの思考に引っ張られて、映画を観に行こうかと思ったが、そもそも今どんな映画をやっているのかを知らないことに気がついた。それならばと、僕は昼寝をすることに決めたのである。

浮上する眠気に逆らわず、夢の劇場へと赴くのであった。

朝の陽射しで目が潰れそうになる。

いつもと違うところから乗り込んだ電車は、なんとなく居心地が悪い。ルーティン化された行動は、ほんのすこしの誤差が生じただけで違和感を呼び込む。

鞆から本を取り出そうとして、首から下げたミュージックプレイヤーが陽光を反射しているのに気づいた。それを隠すのに、上着の中にプレイヤーを仕舞い込んだ。操作性を重視したはずのネックストラップが無意味になる。

外耳に押し込んだイヤフォンからは濁いたテレキャスターの音が流れ込んでくる。押し込むように言葉も飛んできて、それを僕は無視する。

本を開いて視覚的に言葉を捕える。読んでいるようで、読んでいないような、眠気に支配された頭で、ページを繰る。

電車が動き出して数分すると、左隣から話声が聞こえる。そして、それは十分経とうとも止まない。左側からの偏った情報の流入は僕の気分を悪くした。

本を閉じ、上着の中からプレイヤーを取り出して音量を上げた。

そんなことをしても聞こえ続ける会話は、彼らが降りるまでの一時間、絶え間なく続いた。よくそんなにもつまらない話を見ず知らずの他人に披露することができるものだと感心する。

大して読み進まなかった本で鞆を重くしながら、僕も降車することになった。大量の人間が排出されて、同じぐらいの量の人間が乗り込んでいく。その様は生物的で、電車というものが気持ち悪くなる。いったい僕は、この得体の知れない生物の中にどれくらい入りこみ、排出されなければいけないのだろうか。

太陽はすっかり上の方へと昇っていて、僕の目を刺すこともない。

無重力空間で放たれた弾丸のように時間は流れ続ける。

誰を待つでもなく、誰を急かすでもなく、ただただ時計を見て早足になる人間だけがいる。願わくは、僕は短針のようにゆっくりと生きていきたいものである。秒針のように生きられない

。

前日の晴天から一転しての雨空に、どこへ行くにも足取りは重くなり、それが余計に僕の体を冷やして固まらせる。しかし今日は一ヶ月前から楽しみにしていたライブだ。会場に入ってしまうえば、この寒さも忘れられる。

開場の一時間前に整理券をもらい、それから一度駅に戻る。碌にテキストも入っていない鞆をコインロッカーに入れて鍵をする。施錠を必要以上に確認してしまう癖は、小学生のころから続いている。

傘さえもロッカーに仕舞い込んだ僕は、小雨の降る駅前通りを横切って、商店街の屋根へと走り込んだ。

クリスマスイルミネーションで彩られた道は煌びやかで、でもどこか寒々しく感じられた。明滅する光は乱視気味の目の中で不自然にゆがむ。届く光線が肌を変色させて、それでも心の内はなにも変わらない。

手近な雑貨屋に入って適当に商品を眺めて時間を浪費する。すこし高めの値段設定の雑貨でも、使いやすいように作られた商品は買い手を満足させてくれる。そんな雑貨ばかり置いてある店内は僕の気持ちを安らかにさせてくれた。良い生活というのは、ちいさなものでも良いものを使うからこそ実現できるのだらうと思う。

しかしどれだけ良い商品であっても、このあとの予定を考えるとなにも買うことはできなかった。一通り商品棚を回って、手ぶらのまま店を出た。そんな客に対しても「ありがとうございました」という店員の声にほんのすこし罪悪感を抱いた。

そうこうしているうちに整理券に記された時間が近づいてきた。小雨の降り続く、商店街の外へと早足で出て、会場へと向かう。

時折足元に現れる水たまりを避けながら、歩を進める。ちいさな頃はよろこんで踏んで行った道。それを避けるようになったのはいつからだろう。

いくつもの水たまりを避けて開場前にたどりつくとき、そこにはすでに列形成された観客たちがいた。スタッフに整理番号を伝えて、案内してもらおう。列の間に入れてもらい、ちいさく頭を下げる。どうせ会場に入ってしまうえば、こんな番号は関係なくなるのだ。

開場の時間になって、静かに列は動き出す。けれどそこには確かに熱気があって、いつしか、雨に固められた体は熱せられてどんな憂鬱も消し去られていた。

点けっぱなしのテレビから新年の特番がだだ流れて、年始から芸能人らは騒がしい。しかしその画面にはテロップが映されていて、録画されたものだと分かり、よけいに虚しくなる。いったい、どのような心境で撮影をしているのだろうと思うと、新年を迎えたことによるちっぽけな感動も消し去られてしまう。

けれど、そんな煌びやかなテレビも時には汗臭い番組を流してくれる。

高校サッカーを観ながら、餅がでろでろになってしまった雑煮を食べる。これだから質の悪い餅を買おうと……などと思いつつ、これなら恐らく喉に詰まらせて死ぬような人はいないのではないだろうかと考える。要は、味を取るか命を取るかだろう。そして窒息死するような人は味を取るのだ。私もそうになりたいが、それよりも前に餅を食べる気がなくなりそうである。

溶けかかった餅を食べ終えて、いそいそとこたつへと足を突っ込んで一息つく。青森での停電のニュースを聞き、他人事のように思っていたが、もし電気が来なくなってしまったらこたつも使えないのだなと気づくとほんの一瞬、不安が襲う。しかし、それと同時に睡魔が襲いかかるのだからこたつというのは恐ろしい。

ふと去年の寒さを思い出してみようと頭の中を引っかき回してみたけれど、全然記憶に残っていないようだった。雪は降っただろうか。そもそも一年前の私はなにをやっていたのだろう。きっと、なにもしていなかったのだろう。お節を食べ、駅伝を観て、サッカーを観て、くだらない番組を観て、無意味に夜更かしをしていたのだ。そう、今の私のように。私は変われるのだろうか。

将来の先行き不明さにぼんやりとしていると、壁にかけられた十分早い時計の短針はいつの間にか三十度ぐらい傾いていた。

なにをする気も起きないのは正月だから。そんな言い訳をしつつ、数日後に控えた授業開始に備えて、一ヶ月だけの定期を買いに行く。いつまでも正月気分でいられるほど、めでたい生活は送れない。

今年の私はなにが変わるだろう。年齢だけかもしれないし、それよりももう少し変わるかもしれない。けれど、大きくは変わりたくないものだ。それでは私が私でなくなって気がするから。

人生の節目のような成人式を終えた。

当日にはあまり考えたりしなかったけれど、終えてみて、俯瞰してみると愕然とすることがひとつあった。

きっと、あの式で会ったほとんどの人たちにはもう一生会うことがないのだろうということ。

これまではどこか「成人式で会える」みたいな妙な安心感、なにに対する安心感なのか分からないけれど、帰属する集団があったような気がしていた。けどそんなのは思いこみで、式が終わってしまえば、もうあの集団と会することはないのだろうなと頭のどこかで理解する。それは僕が「地元」みたいなものに対する愛情がないからかもしれないけれど、人との出会いは一期一会で、それはやっぱり数年間の学校生活にも該当するのだろう。

成人式では、一期一会というある種の幻想を汚してしまったような気さえする。人は変わるし、それはどうしようもないことだけれど、不意に、成人式だからという理由で会合するべきではないのではないだろうか。これは僕の「変わりたい」という欲求の裏返しなのかもしれないけれど。はたして、そんな欲求が僕の中に存在するかどうかは分からないのではあるが。

しかし、こんなことを感慨深げに思ってみたけれど、友人（だと思っている人）というのはちゃんというし、会おうと思えば簡単に会えるから、とくにそこまで深刻に考えてないというのが本心なのかもしれない。それなのに僕が愕然としてしまったのは、成人式の前から思っていたよりも、あの空間だけでコミュニティが構築されていることに恐怖を感じたからだろう。

それは悪いことではないのに、僕はどうしようもなく「地元」というものだけでコミュニティを形成することが不安でならない。外へ、外へと行きたがる。

そんな僕だから、クラスメイトというたった百数十人で完成されたコミュニティに対して知らずに恐怖を抱いてしまう。そして僕は「もう一生会うことはないだろう」と自分の中で折り合いをつける。

思い出に浸るには、まだきっと早すぎるのだろうと思うのだ。

2011.01.20

---

来週、来年度からのゼミについての説明があるという話を人伝に聞いた。普通なら、こういう重要な情報は大学側が通知すべきだと思うが、どういうわけかこの大学の掲示板は去年の内に廃止されている。

そうか来年度からは私はもう三年生なのかということを見ると、大学生活のあっけなさを感ぜずにはいられなかった。

去年のプレゼミ説明会の際私は風邪をひいていて、けれど出席しなければ書類を提出できなかったために、痛む頭と気だるい身体を大学まで運搬してきた。無理がたたったのか、その週はそれ以降大学に行けなかった記憶が頭の片隅に残っている。

大学に入学して以来、私はなにか成長したのだろうか。なにを以て成長と定義するのも分からず、私は自分の成長を俯瞰することすらできずにいる。立ち止まったまま、時間と場所だけがスライドしていくような感覚。変わりゆく環境と、置いてけぼりの私。

それでも私はそれなりに元気に生きているし、今年の私は風邪をひいていない。一年前とは同じではない。同じ道でも、見える景色が違う。それだけでいいではないか。そう思って私は前を向く。

ゼミについて、簡単な説明を去年の内に受けている私と友人らはぼんやりと来年度のことを考えている。誰かの意見を聞いて、それに追従するほど馬鹿な生き方をするつもりはないけれど、友人がどんな選択をするのか興味があった。けれど尋ねてみてもぼんやりとした答えで、そしてそれは私も同じことで、そうだよねと同調するほかなかった。

迫りくる選択の期日に怯えながらも、それでも後悔のないだろう選択をしながら前へ進んでいくしかない。人生というのは選択の繰り返しなのではないかと私は思う。気ままに生きているふりをして、その実、規定された選択の中でしか生きていけない。自由に生きることは、むずかしい。

大学生活の後半は、どんな選択があるのだろうか。多くの小さな選択と大きな選択がきっとある。目の前にいる友人らと話をしながら、ぼんやりとした未来にピントを合わせていくのである。

試験後の気だるい身体を引きずって、なんとなく電車を途中下車して大型の雑貨店へと足を向けた。なにが欲しいわけでもなく、適当にペンやノートの類を見て行こうと思っただけの行動だった。

人通りの多い道からさっと身を通し、店内へと入りこむ。途端に冷気にさらされていた身体が、暖房で温められる。弛緩した筋肉とともに、エレベータへと向かおうとすると、一階フロアの様子が普段と違っていた。所狭しと、とあるブランドのキャラクターグッズ販売所が展開されていた。

このブランドとの出会いもこんな偶然で、以前は駅構内の小さなスペースで販売されていた。偶然でしか出会わないブランドでも、愛着をもって私はこの製品を使っていた。

はて、今日はお金を持ってきただろうか。私の頭から、定冠詞の付かないペンやノートはすでに消えていた。

財布の中身をさりげなく確認し、私はかごを手にして売り場へと向かった。身体はもう、引きずっていなかった。

思うままに、あまり考えずに商品をかごの中に入れてゆく。ふと目に入ったのは、三千元以上の買い物でバッグをプレゼントという宣伝。がさごそとかごの中身を見て、ざっくりと計算すると、もうすこしで規定額に達するということだった。しかし、それに関わらず、私の購買意欲は衰えていない。いざレジカウンタで会計をすると、樋口一葉の印刷された紙幣が、小銭となって返ってきた。財布は、重くなった。

もらったバッグはやはり安物で、これは母親にあげようとかっそりと思う。

気だるい雰囲気店内で蒸発させて軽い足取りで店を出ると、再び外気が私の身体を襲い、筋肉を緊張させた。白い息をひとつ意識的に吐いて、左手に持ったビニール袋を持ち直す。今日は良い日だったと、試験のことなど地平の向こう側へと投げ捨てて思うのだった。

すっかりと暗くなった空と、ますます明るくなる街の対比に身をゆだねて、光を存分に蓄えた駅へと私の足は進んでいった。